

令和7年度 第5回 岐阜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和7年12月23日（火）13時30分～15時30分
- 2 場 所 岐阜市庁舎 6階 6-1会議室
- 3 出席者 柴橋市長、伊藤委員、小森委員、藍川北学園 河合校長、生徒（4名）
- 4 招聘者 東京理科大学 教授 垣野義典 氏
- 5 傍聴者 一般5名 報道3名
- 6 次 第 (1) 市長あいさつ
(2) 協議

「義務教育学校と次世代への学校づくり」

7 議 事

(13時30分開会)

(1) 市長あいさつ

(2) 協議

① 事務局説明

(資料1 義務教育学校と次世代への学校づくり)

② 招聘者講演（垣野 氏）

(資料2 学びの多様化が図られる時代の義務教育学校と次世代への学校づくり)

③ 意見交換

●小森委員

学校の中身はもちろん、生徒さんの姿から雰囲気の良いが伝わってきた。特に2点感じたことがある。1点は、ハード面が変わったことによってどんな好影響があったかという話の中で、意見が言いやすくなった、持ちやすくなったという変化の声をいただいたのが大変印象に残った。教えるのではなく、学ぶということを考えたときに非常に大事なキーワードだと思う。藍川北学園のホワイトボードや可動式の机といったものが、先生から問題の解き方を教わるということではなく、解を見つけ出していくような交流しやすい授業の形になり、一人ひとりの意見の持ちやすさに繋がっているのだと思った。

もう1点は、生活面について、年の離れた子と接するのが苦手だったけれども、この藍川北学園のコミュニティで1年を過ごしたことで苦手意識がなくなったということは、人生にとって大きな影響をもたらしたのではないかと思う。また、皆さんの低学年の子への印象、関わり方が変わったのと同じように、低学年の子どもたちの高学年の生徒への見方も変わってきたのかもしれない。低学年の子が言語化することは難しいかもしれないが、くじらぐもの写真からは低学年の子が生き生きとしているように見えた。兄弟姉妹のいる家庭が少なくなってきた、地域でも子ども会や家庭同士の繋がりが難しくなっている中で、五つも六つも離れたお兄ちゃんお姉ちゃんと接する場面は小さい子にとっても少ないのだろうと推察され、憧れや安心して接するといったことに本当に繋がっているのだろうと写真や動画から感じる事ができた。そういった意味で、この1年間だけで相当な成果を上げられたことを確認し、これをどう横展開していくかという本日の協議に繋がっていくのだろうと思った。

垣野先生は本当に分かりやすく、建築の中に出会いをどのように仕込むか、演出するかで、設備や家具もどうあるべきか見えてくるという示唆をいただいた。これまで教育委員として訪問させていただいた、同志社中や福井大附属義務教育学校を思い出していたが、まさにそういったことで整理ができると非常に勉強になった。岐阜市の小中学校を訪問させていただくと、いわゆるハーモニカ型の学校がまだまだ多い中で、今まで視察に行かせていただいた学校というのは、学校に入ると、基本的に見通せる範囲が非常に広がった。多くのスペースが見えて、必然的に色々なものが目に入るし、同級生や異学年の生徒、先生等色々な人が目に入る状況にあるのだろうということで、まずそこが古いタイプの学校と違うと思った。自分たちの時代は、空間が仕切られていることが当たり前だと思ってきたが、学年ごとにここでこういう学びをしてこの範囲で動いてと指定するのではなくて、とにかく動くところどこにでも出会いがあるといったことは、固定観念に捉われない効果もあるのではないだろうか。子どもを主語にした学びという意味では、流動性とか多様性といったことはキーワードだと思うので、そういった学びに不必要な枠のようなものをいかに取り除いていくかという考え方が必要なのだろう。そういった意味で、どうしてもまだまだ市内の学校で、出会いを仕込むことが物理的に難しく苦勞している面もあるかと思うが、ヒントがあればお聞きしたい。

●垣野氏

藍川北学園は中廊下型で大きな可能性があるということをお伝えしたが、片廊下型でも頑張ろう

としている学校は日本中にある。例えば、千葉県柏市の土小学校は片廊下型であるが、フルリノベーションして一番変えたのは教室の中である。窓側以外は、3面を黒板やホワイトボードとして使えるようにしているほかに、学年担任制を導入し先生が授業によって入れ替わる。例えば、社会の得意な先生、算数の得意な先生がいたとして、その先生同士が得意な分野によってオフェンスとディフェンスを変えるような感じで、算数の得意な先生が前に立っている間、社会の得意な先生はサブでサポートに回るといったカバーが行われている。岐阜小学校でも同様の取組をされているかと思う。構造壁といっても、一定の開口は抜けるので、お互い何となく見合わせるように対処しているので、何となく見合えるような小窓だけは作っている。それだけでなく、廊下の使い方も工夫され、使える場所は全部使うくらいの思いが感じ取れる。おそらく藍川北学園もそうだが、子どもたちが主語ということで、子どもたちがそれぞれ使えるような側面の廊下との間の仕切りを変えていたりとか、廊下もうまく使われていたり、片廊下型としてはこういった可能性があるものもある。

それらをどのように横展開するかという点について、例えば台東区で気をつけていることは、大きく2つある。1つは、マインドはなかなか横展開しにくいということ。ご存知だと思うが、マインドはなかなか伝播しにくく、伝えても伝えきれない。子どもが主役だよとか、教室は正面じゃなくて、みんなのものだよと言ってもなかなかそれを体感として伝わっていかない。先ほど、出会う形式という建築のお話をしたのは、横展開しやすいからである。つまり、形式化、モデル化した、簡略化したモデル化したみたいなものは横展開しやすい。もう1点は、導入する際に段階を踏むということ。藍川北学園の取組は、相当上級編になると思うので、初級編・中級編・上級編を作って、まずは初級編から入り、経験を積んだ先生が増えてきたら、上級編を投入しましょうといった感じで、いきなり何でもかんでも突っ込んでいくよりは、段階に分けて考えると良い。あとは何をもって、得られた知見とするかということだ。

●伊藤委員

藍川北学園の9年生の皆さんから、愛情あふれたお話を聞かせていただいて大変嬉しい。お聞きしながら、とても風通しがいい学校だと感じた。先生と子どもたち、子どもたち同士、そして地域の方とも色々なところで言いたいことを伝えることができ、助けて欲しいときには助けてもらえるような、とても良い学校づくりを進めていただいていると思った。

藍川北学園に行かれた方とお会いして、良い学校だったとおっしゃっていた。具体的にこの授業がいいとかそういうわけではなくて、イベントを行っていた際に、一生懸命に足にまわりついていたそうで、地域の方はそういう姿を見ることができることがもう嬉しくて仕方がなく、きつときめいたと思う。だからこそ、そういう学校に自分たちも足を運んで何かできることをさせてもらいたいという、良い繋がりがそういったところでできているのではないかと思った。地元の方も少子化というのは当然分かっているんで、何とか学校維持、地域連携の強化ということで、おそらく通常の学校よりも色々な方が関わってくださっているのではないかとお見受けしている。子どもたちも地域の課題を自分事として捉えてお話を聞き、考えを出していくことは、正解がないこの時代に学べる大きなことになっているのだろうと思う。私自身もまちづくり協議会の事務局長を務めており、主体性を持って自分たちの町を良くしたいという思いで進めているが、振り返ってみるとそ

こに子どもたちの意見を全然入れていなかったという反省がある。これから未来を担ってくれる子どもたちの意見を取り入れながら進めていかなければいけないなと思っており、ぜひ今度からまた学校にもお邪魔して、子どもたちはどんなまちにしていきたいか聞いていきたいと考えていた。

垣野先生にお話いただいたハードの部分について、学校が居心地の良い場所になるべきだと思う。家やメディコスよりも、もっと学校側でも自分たちにとって好きな場所なのだと考えてもらうためにどうしていけばいいのかと考えている。先ほど、自然光が入ってくる教室は良い、廊下に椅子やテーブルを置くというお話もあったが、例えば外に椅子やテーブルを置いて、気候の良い日はお喋りができるような場所があっても良いと思う。また、教室は大変密で、子どもたちは人口密度の高いところで1日過ごしていかなければいけない。特に、中学生は教室の中で過ごす時間が長いので、一步出たところに自分のお気に入りの場所を作れるような、例えば床のスペースであってもいいと思いますし、図書館の中であってももちろんいいと思うが、色々なところで自分が過ごせるようなスペースをこちらが意図的に作っていくべきではないかと思う。そういった椅子やテーブルを寄付でいただけるような仕組みも作っていいのではないか。協力いただける民間企業も多いと思うので、ぜひそういうところと繋いでいただけたらと思っている。

学校に行かなくてはならないのはどうしてかと考えたときに、私は社会で生きていくための力をつける場所なのだという答えを自分の子に話したが、それが勉強だけなのかということと当然それだけではない。子どもたちが勉強しなければいけないということで頭がいっぱいになると、勉強が苦手だから学校も苦手というマイナスの思考になってしまうので、生きるための力とは何かということをもっと先生や大人と一緒に考えてあげることが必要ではないかと思う。そして先生方も、藍川北学園や草潤中といった現場を見ていただいて、校長先生がおっしゃること、私たち教育委員会でお話していることが伝わりやすくなると思うので、ぜひ現場で頑張ってもらってる先生たちにもそういったところを見ていただくような機会というのを今後も作っていただけたらと思う。

●教育長

YouTubeで先生のプレゼン見させていただいてから、ぜひ直接お聞きしたいと思い、今日ようやく実現しありがたく思う。参加いただいた藍川北学園の9年生の皆さんは最初の卒業生で、皆さんが大学を卒業して、岐阜県の先生になり、藍川北学園に赴任したとすると、今の1年生の子がちょうど8年生になる。今の1年生が君達のような先輩に囲まれながら9年間育つとしたら、どんな力、どんな心が育つだろうか。

今日は、子どもを主語にする教育への転換ということで、藍川北学園は何回でも行きたくなる学校を校長先生はじめ、生徒さんみんなで作ってくれたと思う。岐阜市の不登校児童生徒数は1185人で、いじめは412件の認知がある。この子たちは、僕ら大人に今の学校は面白くない、今の学校の仕組みでは駄目だ、変えて欲しいと言っているのだと毎日思っている。だから、全国で言えば35万人もの、岐阜市の人口に迫るくらいの子どもたちが学校に行きたいのに何となく気が引ける、行かないという選択肢を持っているので、日本の教育は変えなければいけない時期に本気で来ていると思っている。先生は最大7年までしか同じ学校にいられないので、1年生から9年生になるまで

1つの学校にいられず、子どもが子ども同士で文化を繋いでいかないと、学校教育は伝統になっていかないのだといつも思っている。そういった意味合いでは、今年の9年生の皆さんが作ってくれた学校は素晴らしいと思っている。

●生徒①

地域との関わりがこの1年間で深くなり、藍川に残りたい、頑張りたいという思いが強くなっていると思う。僕は1年間だけだったが、今の1年生が卒業するまでには自分たちの9倍強い思いになると思う。

●生徒②

今、色々な人達と多く関わっているので、今の1年生には、地域の人たちも大切にしながら、他の先輩後輩も大切にしてくれるような人になってほしいと思う。

●生徒③

先生たちは最大7年までしかいられない。だから、子どもたちの方が部屋の使い方がわかると思う。1年生が9年間生活して、探究の部屋も自分たちとは違う新しい使い方や、色々な行事の工夫をしてほしい。そうして自分たちで授業や行事を作っていく方が学習面でも盛り上がると思うし、地域の方との関わり合いも深めていけると思う。

●生徒④

先生に学校は小さな社会ということを教えてもらったことがある。今、1年生から9年生まで、幅広い年代が良い意味で先生と距離が近い。色々な年齢の人と交流することで、この1年でたくさんのことを成長させてもらったので、コミュニケーション能力や、色々な人と関わる力が成長しているだろうと思う。

●河合校長

今4人がこのように話してくれたことが学校にとっての財産で私も嬉しく思う。8年後にどうなるかということで、2点思うことがある。1点目は、今の子どもたちのように、異年齢の人たち、例えば地域に出たときとか社会に出たときに、自分と同学年ではない人、多様な方と出会ったときにどうやって接するとよいのかということは今学んでいるのではないかと思う。年代が上の方も下の方も触れ合う機会があることで、思いやりの心を学んでいけるのではないかと思う。

2点目は、一つ一つの出来事や事象に対して、これはなぜか、どうしてこうなるのかということについて自分で考えていこうとする、そんな力が身に付いていくと思う。例えば授業でも、わかあゆ学が続くにしても、どうしてそうなるのかということが、どんどん自分で深まっていくような形に今の1年生がなっていくのではないかと。9年生の生徒が教員になって戻ってきた際には、もっともっと新しい学校になるのではないかと考えている。

●教育長

垣野先生のお話の中にも学校をつくる時の建築の要素がでてきたが、学校は学びの場であり、安らぎの場であり、楽しみの場であるという3要素は絶対抜いてはいけないと40代の頃からずっと思っている。学校をつくる時の建築要素、根本の要素は何があるのだろうか。例えば、楽しい学校を作ろうと思ったら、空間が必要であるとか、そういった高さや広さ、色、形だとか、先生の中におそらく哲学としてあって建築を作られるのではないかと思う。リノベーションでどこまでできるかということで、協議しながら作ったので、何かこういう要素を考えると、安心して通える学校や楽しい空間ができるということがあれば教えていただけるとありがたい。

●垣野氏

運用の手練れがないと、なかなか空間はうまく起動しないが、とはいえ空間がないと使ってみようという発想もなかなか浮かばないと思う。通常学校に行くと、規律や管理という空気が醸し出されているが、藍川北学園で大変良いと思ったのは、共有と共感で、先生が生徒に共有し、おそらく生徒も先生に共感をしながら、お互い良き隣人として一つの総体ができていることだ。そういう共有や共感をしようという空気がある中では、どんな建築であっても大変魅力的に映り、使いこなせると思う。その中でいつも念頭に置いているのは、子どもが選択できるかどうか。それに一番近いものが家具と場所になってくると思う。先ほど教育長からお話のあった、1185人の不登校の子どもたちにとって、少しでも面白くしていくための一つの考え方である。もう1つは、みんなが会うためにお互いに見合えるという点が肝要だと思っている。藍川北学園は、自分の教室だけで閉じるのではなく、他の教室や他の学級や他の学年の子たちと繋がっているということがあり、色々な人と見合うことができる。そういった意味では、視線がどうやって繋がっていくかが重要で、それを意識して作った学校の1つに奈義中学校があるので、ぜひ見ていただきたい。どこで誰が何をしているかが少しずつ分かるような校舎作りによって、会うことも増えるし、みんなが繋がり合えることが建築でもできることで、必要なことだと思っている。

●市長

全国各地に魅力的な面白い学校が沢山あると改めて実感した。私も今ずっと小学校を回っていると、ほぼ昭和の時代に作った、私や小森委員や伊藤委員が生まれる前からあるような学校が山のよ

うにあり、ハードの限界を強く実感している。

藍川北学園は、既存の中学校をリノベーションして、中廊下型の校舎だったということもあり、ある程度色々なことができたが、今の昭和40年代や50年代にできた学校は、いわゆる出会うとか繋がる、あるいは視覚といったものでお互いを捉えられるっていうことの発想とおおよそ無縁なハードの中で、子どもたちの学びを豊かにしていくために、どのように手を加えていったらよいかということは改めてハードルの高い課題だと実感した。先生がおっしゃっていただいたように、place to prepare for lifeという考え方は、水川先生が学校は子どもたちの生活の場であり社会だとおっしゃってくださるが、まさに社会に出ていくにあたって準備をする生活の場であり社会だ。そこでの学びや集団生活は、大変有意義であるということをも非常に感じている。こういった小中一貫の義務教育学校で、未来の学校を作りながら、最終的には一気に全てを改修するわけにはいかないの、既存の小中学校で限界点はあるけれども、限界点により近づけながら、どのようにしていくかということは、2030年代に向けての今後の我々の課題だということを改めて強く実感をしたところだ。

先ほどの藍川北学園9年生からの発表は大変嬉しかった。これを一言で言うと市政ではシビックプライド、皆さんで言うと、学校に対する愛着や誇りであり、それが格段に上がった1年間だったのではないかと、皆さんの発表を聞きながら感じたところだ。というのは、私は藍川北中学校時代も訪問しており、閉校式も出席し、その様子を全て自分の中で反芻していくと、この愛着や誇りに尽きるのではないかと思う。自分たちの学びに対して充実感があり、後輩たちと1年間積み上げてきたもので、しっかりと自分たちとしても評価でき、満足感があるのだと思う。そこから感じられる自分の心の成長には、言葉にできないような喜びや力があるのではないかと思うので、そういう姿が、もっともっと社会の中に広がってほしいと思っている。それはおそらく、1年生と6年生よりも、1年生と9年生という異学年の交流や学びだからこそ得られるものではないかと感じている。皆さんがこれから残してくれるものが伝統になると思うので、残りの3ヶ月で色々なものを残してほしいと思う。自分たちの学校について人に伝えられるということは大きな力だと思うし、特に、将来教育の場で次世代を育てたいという気持ちが芽生えてきた生徒さんには、その気持ちをさらに育んでほしいと期待をしているので、ぜひこれからの学びを重視してほしいと思う。

今回の藍川北学園は、予算面では学校を建てるよりも遥かにローコストで整備した。しかし、このように子どもたちの学びが深まり、そこで働いてくださる先生方も改めて教育界に身を置くことの喜びや幸せを実感してくださっているのではないかと推察するに、ハードの限界があるとしても、その限界にどう迫っていくのか今後しっかり考えながら、岐阜市の教育をより良くしていきたいと思ったところである。垣野先生には、建築というアプローチから学校教育をここまで解きほぐしてしていただけたことに大変感謝をしており、ぜひこれからも日本の未来のためにご活躍をいただきたい。